

◆沈み込み帯の産物

日本人とひすいの関係は実に古く、新潟県糸魚川市で出土したひすい製の「たたき石」は約7,000年前の縄文時代にハンマーとして使われていました。これは、世界最古のひすいの利用例だそうです。

ほかにも勾玉（まがたま）や宝飾品、石針などの材料にも使われるなど、古代から日本人の中に「ひすい文化」が成立していた点が特に評価されました。

そんなひすいが生成されるのは、「沈み込み帯」と呼ばれる場所。海底を移動する海側のプレート（岩盤）が、陸地を乗せた陸側プレートの下に沈み込んでいる地域のことです。

日本列島の周辺は、陸側の北米プレートやユーラシアプレートの下に、海側から太平洋プレートやフィリピン海プレートが沈み込む複雑な構造で、まさに沈み込み帯となっています。

海側プレートが海溝から沈み込む際は、運んできたさまざまな鉱物の堆積物が陸側プレートの端にはぎ取られて蓄積し「付加体」を形成します。これが両プレートに挟まれて高温・高圧にさらされ多様な鉱物に変成、深部でひすいが作られます。

付加体は、堆積物が徐々に運ばれてくるため増え続け、陸側にどんどんせり上がって日本列島の骨格を形成。このとき、ひすいも比重の軽い岩石とともに地表へ上昇します。

日本のひすいが生まれたのは約5億年前で、世界最古とされています。これなら国石に選ばれたことに納得できますね。

◆水晶、金も候補に

鉱物の多様性に富む日本を象徴する石ですから、候補も多彩でした。日本鉱物科学会は11種類の1次候補を選んで国民の意見を公募。最終候補として、ひすいのほか水晶、自然金、花崗岩、輝安鉱の4種を選びました。いずれも日本らしさを感じさせる石ばかりです。

水晶は鉱物名ではなく、石英の無色透明な結晶のこと。美しく硬いため、縄文時代から装飾品や武器に使われてきました。2つの板状結晶が接合してハート形に発達した「日本式双晶」は特に珍重されています。

かつて日本が「黄金の国ジパング」と呼ばれるほど大量に産出した自然金は、大判や小判がおなじみですね。今は全身が黒っぽく見える奈良の大仏も、752年に開眼したころは表面が金で覆われていました。

花崗岩は代表的な火成岩で、石英や斜長石、黒雲母などさまざまな色の結晶が集まってできています。緻密で硬く、石材としては御影石とも呼ばれ、国会議事堂や東京都庁の建材にも使われていることで有名です。

輝安鉱はレアメタル（希少金属）であるアンチモンの硫化物で、日本刀のような形の結晶が1メートルにも育ちます。海外に愛好家が多く、日本産は世界的に知名度が高いそうです。

このほか、1次候補には黄玉の和名で知られる宝石のトパーズ、古代人が矢尻などの石器に使ったガラス質の黒曜石、断面が花びらのように見える桜石なども挙がっていました。

同学会では「大地は石でできており、石の中には地球の歴史が刻まれています。ひすいへの親しみを通して石の多様さや奥深さに興味を持っていただきたい」と話しています。



筆者紹介

伊藤壽一郎（いとう・じゅいちろう）

東京都生まれ。学習院大学卒業後、産経新聞社に入社し、文化部、経済部、社会部などを経て2002年から科学部。現在は文部科学省の科学技術部門を担当し、原子力から地震、宇宙、物理、化学、生物、ITまで、幅広い分野を取材対象としている。著書に「生きものの変異 温暖化の足音」（共著、扶桑社刊）、「新ライバル物語 闘いが生む現代の伝説」（共著、柏書房）などがある